

MASSAWA



アスマラから 115km、紅海沿岸に位置する港町です。海岸地方は季節により非常に暑くなり、最も暑い4月には気温は 40°C を超えることもあります。マッサワはまた、エリトリアで最も古く歴史がある街の一つです。また、交易・軍事上有利な立地から、古来よりさまざまな勢力が入り乱れ波乱万丈の歴史をたどってきました。

古代ギリシャとエジプトではマッサワは交易上の重要都市でした。10 世紀にはムスリムが居住していましたが、16 世紀になると、オスマントルコの支配下に置かれ、真珠や皮革、魚介類などの交易の拠点となりました。そして 19 世紀後半には、イタリア領アフリカの主要港となりました。

1991 年まで続いたエチオピアからの独立戦争の際には、マッサワは軍事的拠点であったために、戦闘により街の大半が破壊されてしまいました。今でも、多くの建物がマッサワ戦の激しさを物語っています。

しかし近年では、国際的な港町としての魅力を取り戻し、近郊には、海水浴客でにぎわいうラクダも闊歩する Gurgusm ビーチや、船ですぐの Sheikf Said 島などがあり、海岸のリゾートホテルの建設も進んでいます。また紅海やダフラック諸島への玄関口でもあり、ダイビングに訪れる観光客などで賑わっています。

マッサワのみどころ

旧皇帝宮殿 Former Imperial Palace

かつてエチオピアのハイレ・セラシエ皇帝が、エチオピア海軍士官学校の卒業式のために毎年マッサワを訪れた際に使用したため、皇帝の宮殿と呼ばれています。建設されたのは、皇帝の時代より前で、トルコの支配者によって建てられ、その後エジプト人、イタリア人へと所有者が変わりました。マッサワのうだるような暑さを凌ぐため、建物は通気をよくする広々としたアーチやドームがつけられています。1980 年代後半のエチオピア共産党政権とエリトリア人民解放戦線の戦闘の際に、宮殿は爆弾で爆破されてしまいました。現在は、建物はエリトリア政府の所有で、かつては修繕して博物館にする話もありましたが、現在も廃墟のまま保存されています。



旧イタリア銀行

1920年代に建てられたもので、贅沢な造りがマッサワの黄金時代を彷彿とさせます。四面をバルコニーに囲まれ、コリント式柱頭、有孔欄干、クローウィング・コーニス、中方立て窓など細部の装飾にも贅が尽くされています。戦闘による損傷が激しいですが、現在、クウェート企業による修繕計画が進められ、全室スイートルームの高級ホテルに生まれ変わる予定です。

●マッサワ文化財の修繕計画●

戦闘により大きな被害がでたマッサワの建築物や文化財ですが、現在は、修繕計画が進められており、宮殿や旧イタリア銀行をはじめ、市内各所の文化財の補修が進められています。

<http://www.edessagroup.com/eritria.asp>



ホテル・トリノ

1930年代後半に、建築家 Ugo Rama の設計で建てられたムーア風の建築。現在もホテルとして営業しています。建物の落ち着いた雰囲気とは裏腹に、建築当時は、交差点に面した屋上部分に、11本のキャンドルが雁行型に並ぶ奇抜な装飾がつけられていました。

スーク（市場）跡

広場から続くのは、かつてのスーク（市場）のアーケード。かつてはマッサワの中心として商店が軒を並べ栄えていましたが、現在はアーチやエントランスの意匠などに往時の名残のみです。ここも修繕計画により近年蘇る予定です。



聖マリア聖堂

Tiwalet 島への入り口にある、1953年にテワフド、エリトリア正教会によって建てられた教会です。Red Sea Hotel から歩いて2～3分の距離にあり、通りからは側壁の見事なステンドグラスがのぞめます。エチオピア領時代には、毎年、海軍学校の卒業式出席のためにマッサワを訪れるハイレ・セラシエ皇帝が参詣に訪れていた聖堂としても有名です。

マッサワ国立博物館

マッサワ市内に位置するエリトリア国立博物館のマッサワ館。2000年に、独立戦争のマッサワでの激戦「フェンキル作戦」の10周年を記念してオープン。自然科学、考古学、民族学、植民地期の文化についての展示があるほか、独立戦争についても、兵器や戦場医療器具、戦場の写真や作戦図解などが展示されます。





■ ■ ■ マッサワ戦戦没者追悼公園

独立戦争中のマッサワ戦での戦没者を記念した広場。青空の下、3台の戦車がモニュメントとして飾られています。平和な時代にふさわしく砲身からは、砲弾ではなく水がほとぼしる噴水となっています。3台の内、中央の戦車は、“Commander No.1”として知られる1977年のアデブセマットの戦いでEPLFがエチオピア軍から捕獲した初めての戦車です。両側2台は、'90年のマッサワ戦での戦車です。正面には、戦没者へ捧げる大統領の碑があります。

1990年のフェンケル作戦、1977年の戦い、またマッサワ解放のための全ての戦闘に倒れた英雄たちを記憶するために、そして彼らの献身や勇気へのトリビュートとして、エリトリア国民とエリトリア国はこの記念碑を捧げる。マッサワは、胸を張って、希望と自信、そして努力と決意を胸に、命を賭けて街に自由の光をもたらした英雄たちを祝福したい。現在、そして未来においても。人々に勝利あれ！

聖なるこの日、戦没者祈念日に。1996年6月20日
エリトリア国大統領 イサイアス・アフウォルク

■ ■ ■ マッサワ沖の難破船

この海域には、第二次世界大戦中に沈没した船やエチオピアの戦艦がいまだに多数沈んでします。マッサワ沖では、12隻の難破船が確認されており、海面下3mに沈んでいる船もあれば、海面下40mにあるものもあります。海岸沿いのRed Sea Hotelからは、沖合いに沈没船のひとつを眺めることができます。これらの難破船は、第二次世界大戦中のイタリアの戦艦、輸送艦なども含まれ、中には戦車も確認されています。



マッサワ戦

内陸国エチオピアは、エリトリア併合により、紅海への玄関口マッサワを手に入れ、エチオピア海軍総司令部をマッサワにおいていました。独立戦争が佳境に入っていた1990年2月、EPLFの部隊は、陸海両方からの奇襲作戦でマッサワを奪回しました。この攻撃により、エチオピア軍はマッサワから70km内陸に入ったギンダまで撤退を余儀なくされます。マッサワ奪回により、アスマラのエチオピア軍への主要補給路が断たれ、これ以降、空路による補給に頼らざるを得なくなります。この報復として、当時のメンギスツ・エチオピア大統領はマッサワ空爆を命じ、マッサワには大きな被害をもたらされました。



■ ■ ■ シャヒ・モスク Shahi Mosque

シャヒモスクは、アフリカ大陸で最も古いモスクだと考えられており、おおよそ1000年前に建てられたと言われています。当時の建物は、今は残っていませんが、同じ場所に新しいモスクが建てられています

■ ■ ■ ハマル・モスク Sheik Hamal Mosque

創建当時から碑文や経典がある古いモスクで、1580年に建てられたと考えられています。Shafi モスクもこちらのモスクも訪問可能ですが、係りの人は不在のことが多く近場で開錠してくれる人を見つける必要があります。

マッサワとイスラム教

7世紀からのイスラム人口の増加により、エリトリアの沿岸地域には大きな変化が訪れました。アドリスが衰退したことにより、ダハラック諸島など他の地域が貿易港として栄え、アラビアから移民してきたイスラム教徒たちの拠点となっていきます。マッサワは、こういった島々への玄関口であり、この時代におけるイスラムのアフリカ進出の主要なゲートの一つでした。マッサワ島の東端にある古代Sahaba Shrineは、預言者ムハンマドの随行者たちが大商人からの迫害に遭っていたアラビアから亡命する途中、615年に上陸した場所だと信じられています。今日では、この場所は、エリトリアのイスラム教徒にとって最も聖なる場所と考えられています（港内立入り禁止区域内のため訪問は不可能です）。



KEREN



ケレンは、12万人の人口を擁するアンセバ地方の中心都市です。アスマラからは北西約90kmに位置し、バスで2時間半の距離にあります。「ケレン」という名は、“高原”を意味し、その名の通り山中に位置し、太陽は東の峰から昇り、西の峰に沈んでいきます。人々の暮らしはとてものどかで、今でも自動車の数より、ラクダやロバの数の方が多くいます。

また、ケレンは言語や宗教の交差点で、ラクダのキャラバン隊や、トルコ様式のモスクも見られ、住民はターバンやカフタンで装い、中東のような雰囲気も漂わせています。また、多くのイタリアやエチオピアの植民地時代の遺産があります。町には、イタリア近代建築のお洒落な公共建築物が建ち並び、ロマネスク様式のカトリック教会もあります。

また、第二次世界大戦中のイギリス軍とイタリア軍の激戦地であり、ブーゲンビリアに彩られた美しいイタリア人墓地は一見の価値があります。

また、買い物もケレンの魅力の一つです。豊富な果物や野菜に加え、新鮮な牛乳が有名で、バター・チーズ工場もあり、プロヴォローネチーズなどが生産されています。また、町には、銀細工が買える市場や、木材市場もあり、家畜を売買するラクダ市なども開かれています。

ケレンのみどころ

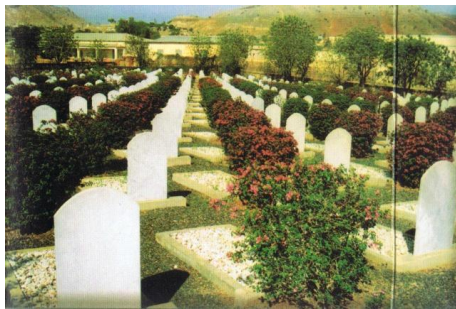
■■■ 連合軍墓地（イギリス人墓地）

中心部から2kmほど、旧鉄道駅を超えて、アゴルダットへ向かう道沿いにあります。第二次世界大戦中に亡くなった440名の墓があり、大理石の墓碑には名前や階級、戦没日などが刻まれています。また同じ敷地内には、ケニアから来た285人のシーク教徒とヒンドゥ教徒が眠る火葬場・墓地があります。



■■■ マリアム・デアリット

ケレンの町の北西 2km ほどのところ、イタリア人墓地から 20 分ほど歩いたところに、“Mariam Da'arit” として広く知られる有名なバオバブの聖堂があります。大きなバオバブの木の幹の中に作られた小さな聖堂で、1825 年にフランシスコ会によって作られたものです。

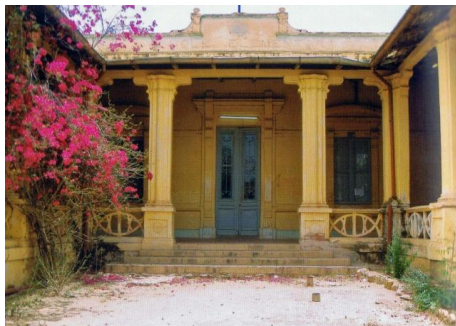


■■■ イタリア人墓地

1950 年に作られた町の北東部にあるブーゲンビリアに彩られた墓地。総計 1228 人が埋葬されており、614 人がイタリア人兵士、エリトリア人“アスカリ”は 614 人です。連合軍墓地と異なり、ここでは人種政策がいまだに適用されています。イタリア人兵士の墓碑のほとんどには、きちんと名前などが刻まれているのに対し、エリトリア人墓碑の 99%では、名前も階級もなく、ただ“無名兵士 (Ascaro Ignoto)”とだけ記されています。

■■■ 旧エリトリア鉄道ケレン駅

アスマラから 104km 地点のケレン駅は、典型的なイタリア建築物。1910 から建設が始まり、実質的な工事は 2 年間でしたが、イタリアの第一次世界大戦参戦やイタリアの業者の倒産などで、完成には 12 年の歳月がかかりました。かつてのプラットフォームには意匠が凝らされた柱が並び、屋根を支える鉄骨もどことなく優雅な曲線を描いて増す。鉄道駅は現在、バスステーションとして使用されており、活気溢れる人々の生活の中心となっています。



■■■ イタリア建築

鉄道駅をはじめ、City Administration や Housing and Commercial Bank など様々な建築物が残っていますが、多くは 1902-22 年に建てられました。この近隣の行政の建物は、多くがイタリアの 20 世紀初頭の建築様式を取り入れたユニークなものとなっています。ケレンの Cinema Impero は、以前は、ファシスト党事務所 (カサ・デル・ファッショ) として使われていた建物を改築したものです。

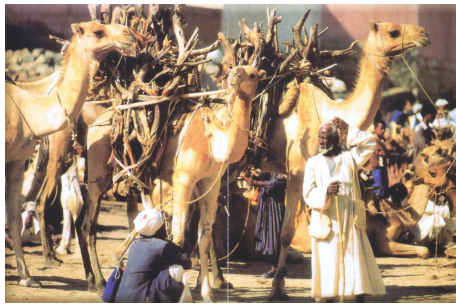
写真左：小学校 写真左下：Housing and Commercial Bank

写真中央：City Administration 写真右下：Cinema Impero



マーケット

メイン・マーケットは、ケレンホテルの背後、ホテルとイタリア人墓地の間の区域にあります。中心には、果物や野菜、スパイスの露店が並び、周辺には数え切れないほどの仕立て屋や職人の店が並んでいます。土産物を選ぶには最適で、種類が限られるもののアスマラより安い銀細工や、バスケットなどの民芸品や陶器なども豊富です。



ラクダ市

アスマラ方面からの道路が Ciuf-Ciufit 川を渡る橋のあたりに、干上がった河床でラクダ市や木材市が開かれます。ラクダ市では、1日で100頭ものラクダが集まり、人々は、3日も4日もかけて村々から木材を運んできます。ラクダに最も近寄れる絶好のポイントですが、市が立つのは月曜日です。

エジプトの砦

19世紀のエジプトの難攻不落の砦 (Tigu) には、いまでもエチオピア軍の大砲が残されています。砦の頂上 (1460m) からの眺めは格別です。麓には、1977年の戦闘で破壊されるまで古い皇帝宮殿がありました。



エリトリアの国のシンボル

【国旗】

エリトリアの国旗は、緑、明るい青、赤、金色の4色で構成されています。緑は、農業資源と豊穡を表し、明るい青色は海洋資源と豊かさを、金色は鉱産資源と豊かさを、赤色は、祖国防衛のために倒れていった英雄的な男性たちや女性たちを表現しています。中央の記章は、3つに枝分かれした若いオリーブの枝で、15枚の葉をつけた左右の枝が、6枚の葉を持つ中央の枝に向かってになっています。外周のオリーブの枝は、左右あわせて30枚の葉を持ちますが、これは、解放のために費やされた独立戦争の30年間を表しています。



【国章】

エリトリアの国章は、ラクダとオリーブから構成されています。中央のラクダは、ヒトコブラクダです。周りを取り囲むのはオリーブの枝で、下部のリボンには、3つの主要言語で、国名が表記されています。左よりティグリーニャ語、英語、アラビア語になります。



DIVING



エリトリアには素晴らしいダイビングスポットがありますが、ダハラック諸島や、マッサワ北部（Desie, Madot, Nakura, Kundubul, Dahlak, Durgam, Durgella, Dehle and Dehl Bahot）などもそれらの一つです。島々では、天然の、眩しいほど白い砂浜がどこまでもひろがり、スイミングやスポーツ・フィッシング、ウォータースポーツに適した美しい海も旅行者には大きな魅力です。

また、マッサワ付近のダイビングでは、長かった独立戦争の思わぬ副産物がみられます。戦闘の間、地元の猟師たちは休漁を余儀なくされたのですが、その結果、魚の数が目を見張るほど増えたのです。また、非常に孤立した地域であったため、マッサワの魚たちは他の有名なダイビングエリアのように人間に対して大きな警戒心を抱いておらず、素晴らしいダイビングが体験できるでしょう。

マッサワには、PADI 認定のダイビングセンター（Eritrea Diving Center）もあり、スタッフ、船の提供などを行っています。

■ ■ ■ エリトリアダイビングセンター（EDC）

PADI 認定のエリトリア・ダイビング・センターは、1992 年に設立されました。それ以降、ダハラック諸島でのダイビングに十数年の経験を積んできています。センターでは、ダハラック諸島へのダイビングエクスカージョンを提供しています。エリトリアでの、唯一のダイビングセンターになります。

センターでは、2名の PADI 公認インストラクターや、4人のダイビング・マスター、3名のスキッパーがいます。

センターでは、3隻のファースト・ボートを所有しており、45分以内に島々へ行くことができます。また豪華なハイテクボートも購入予定なので、外洋やその他の島々へも快適で安全な旅を提供することができますようになります。

ダイビングスポット情報－エリトリアツアーズ

<http://www.eritreatours.com/en/diving.html>



■ ■ ■ ダハラック諸島

エリトリア中央部の 360 以上の島を持つ群島。最大の島は、沖合 58km の Dahlak Kebir 島で東京 23 区とほぼ同じ面積を持ちます。ティグレ、アフア、ダヒリク等を話す人々が住み、昔ながらの漁業や真珠漁、ヤギ・ラクダ飼育などで暮しています。

考古学的にも重要な地域で、8~12 世紀のネクロポリス（集団墓地）や、古代アラビア語の墓碑銘、様々な時代の歴史的建造物の遺跡やサンゴ岩でできた貯水池などがあります。

ダハラックは、先史時代まで遡る紅海の古代交易システムを考える上でも重要な地域です。何千年もの間、内陸部への“踏石”として機能し、アクスム王国時代には、エジプトや地中海、インド洋への中継地でした。イスラム文明が到来した際には、ダハラック諸島とマッサワは、文明の中心地となりました。



Kebir 島の北数キロにある Adel 近辺には、石造建造物や、道路、前イスラム時代の集落などがみられ、マッサワから 6 海里の Asarca 島付近では、アドッリスで出土した 1 世紀のものとよく似たアンフォラを大量に載せた難破船も発見されています。

今日では、ダハラック諸島は、エチオピア統治下の政治囚収容所としての歴史を終え、考古学・歴史、海洋調査地域の中心地という新たな歴史を築き始めました。観光センターも建設中で、NME による世界遺産候補リストにも載っています。



■ 生態系

エリトリアの海洋と沿岸は、多様な生態系に満ちています。サンゴ礁、マングローブ、海草床、砂地や沼地の平坦地などがありますが、この全てが漁業にとっても、また観光にとっても重要なものになっています。潮間帯や海岸付近の海域は、海洋生物や陸上生物の多様性を支えており、生態系および経済的重要性にとっての鍵エリアです。



■ 紅海の特長

世界の多くの海洋と異なり、エリトリアの紅海は湧昇現象が少なく、また流入する恒常的な河川がありません。そのため、この海域は一次生産力が低く、栄養分が限られています。インド洋につながっているため、北部よりも南部において季節風による海水の入れ替わりが顕著です。結果として、紅海南部の方がより栄養分豊富で、高い一次生産力を持ちます。さらに、インド洋から漂流して来る生物種は、紅海南部のみに局所的に集まります。しかし、それに関わらず、紅海南部の比較的低い水温と高い堆積作用により、サンゴ礁の発達には南部においてより低く、サンゴ礁系のコミュニティ多様性もより低くなっています。



エリトリアの沿岸域は、漁業にとって非常に好適な生態系を持っています。サンゴ礁域や、ダハラック諸島平坦地の広範な海水面や数多の魚の住処が、豊かな漁業に大きく貢献しています。調査の数はまだ少ないですが、エリトリアの紅海域では 600 種以上の魚が記録されています。



■ サンゴ礁

サンゴ礁については、科学的調査により、38 のジャンルのイシサンゴ(Scleractinians)に属する 154 種が確認されました。エリトリアのサンゴ礁水域は、サンゴの生育に好適な暖かい海水と少ない降水という気候を持っています。島嶼部の海岸線に沿ったサンゴ礁の形成は、良い条件下にある一方、本土の海岸線に沿ったサンゴ礁は、河川流入による堆積物の影響で、あまり発達していません。



NATURE



■ ■ ■ フィルフィルの森

フィルフィルは、サヘル地帯と同じ緯度に位置し、アフリカ大陸で最も北に位置する熱帯雨林で、地元の人々には神秘的な場所として知られています。国内の多くの地域が厳しい森林破壊に遭ったときもここだけは生き延びた特別な森です。

森林は急崖に沿って海拔 700~2000m の高さに 40km にわたって広がり、植生は、常緑樹と落葉樹の混合から、標高が低い地域ではアフリカ・オリーブ、高い地域ではアフリカ・エンピツビャクシンなどに変わります。

大地溝帯の急崖にぶつかり上昇してくる紅海からの暖かい湿った卓越風から水分を得ており、この卓越風のおかげで毎年 10 月から 2 月、4 月から 5 月に湿潤になり、標高の高い場所にも雨林が生育できる条件がうまれます。

こういった特殊な気候により、非常に狭い地域の中に多くの生物種が生息できる繊細な生態系が作られ、そこでは昆虫や植物、動物でさえもまだ未発見の種が生息している可能性があります。

2006 年に道路が改善され、いまでは国内一良い道路が通っています。旅を楽しむなら 2, 3 日がお薦めですが、フィルフィルを経由してアスマラからマッサワへ日帰りで行くことも可能になりました。どんなタイプの車でもいけますし、自転車での旅も可能です。森の神秘をもっと知りたいならば、森の中のホテルに滞在することも可能です。



TEWAHEDO



—エリトリアの修道院—

6世紀にエジプトより9人の聖人がエリトリアにやってきた際に、修道院というシステムも持ち込まれ、その後、13世紀に最盛期を迎えたと考えられています。古くからの修道院の中には、9聖人の到来まで遡る豊かな歴史をもつものもあり、また、14～17世紀に創建されたものもあります。エリトリアの僧院は、外界から隔絶された山や崖の上で、宗教的実践を守るだけでなく、キリスト教芸術や、典礼の宝物、文化的な伝統や精神性の守人として機能してきました。僧院は、起きてきた出来事や歴史資料である年代記を保管し、プレキリスト教の伝統、およびキリスト教、歴史、そして数百年も前に導入された芸術や建築の伝統を保持する機能を果たしてきました。

エリトリアの僧院・古教会のみどころ

■ ■ ■ ハムの僧院

おそらく国内最古のキリスト教僧院である Debre Libanos は6世紀初期に、シリアの宣教師 Aba Meta によって創建されたと考えられています。アスマラから150kmの Debre Libanos は、元々はハム村内にありましたが後にハム平原の下の崖の端に移されました。ハムの僧院には、“ゴールデン・ゴスペル”と呼ばれる13世紀の土地許可状の複製を含む金属製のカバーの聖書があり、また非常に多くのミイラが発見されています（500年以上前のものと推定）。ミイラは、黄色い布で巻かれた上に、動物の皮できっちりと巻かれ、その姿は現代の修道士と同じようです。この場所はエリトリアで最も重要な場所の一つと考えられ、すでに多くの観光客が訪れています。

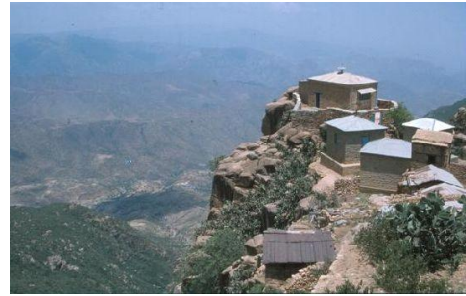


■ デブレ・ヒゼンの僧院

アスマラから24km Nefasitの町の近く、Bizen山の山頂に、Debre Bizenはあります。14世紀にAbune Philliposによって建てられ、険しい立地ゆえに、数々の支配者の交代を超えて存続してきました。修道僧の家、教会、教室や農業用建物などからなる一つの村のようで、数十人の修道士と、学生たちが暮しています。僧院には、千を超える中世の写本が残されており、厚い皮や布、木材で綴じられた宗教画の描かれた羊皮紙の本も含まれています。

僧院は女人禁制です。男性は僧院を訪れることが可能ですが、825mの高さを7kmかけて登らなくてはなりません。僧院からの眺めは最高で、周囲の山々だけでなく、晴れた日には80km先の紅海も臨めます。早朝に登り始め、午後遅く下りて来るのが理想的です。訪問の際には、僧院維持や修理のためのお布施を置いてくるのが慣わしとなっています。

かつては豊かであった僧院の財産も、エチオピアのデルグ軍事政権のあいだに、大半が差し押さえられてしまいました。デルグの文化人民委員たちは、宗教組織を積極的に妨害し、宗教的工芸品は燃やされなくてはならないと命じられました。デルグ政権下には、僧院は周辺地域を監視するための軍事基地として使われていました。



■ バラクナハの古教会

エチオピアとの国境から北へ十数キロ、幹線道路から数キロ先へ分け入り、まるでアーチのように両側からサボテンが生い茂るラフロードを抜けた先に、テワフドの古い修道院がひっそりとたたずんでいます。エリトリア正教（あるいはコプト教）としても知られるテワフドは、4世紀にエリトリアに伝来し、この地で独自に発展してきたキリスト教。

エリトリアでは、国中に古い教会や修道院が点在し、それぞれに縁起をもっていますが、バラクナハの教会でも創建については不思議な伝説が伝えられています。その伝説によれば、その昔、ローマでキリスト教の弾圧に遭ったキリストの使徒の一人が、迫害を逃れてエリトリアにたどり着き、この地にキリスト教を広めたとのこと。歴史を感じさせる入り組んだ構造の修道院の奥には、代々守られてきたミイラが安置されており、伝説もさもありなんと思わせる雰囲気漂わせています。

また、ここは観光用に整備された場所ではないので、訪問に際しては現地のガイドの案内が不可欠です。



エリトリア基礎情報

独立記念日	5月24日
時差	GMT+3（日本より6時間遅れ）
国土面積	124,300km ²
標高	海面下-116mから海拔3018mまで 最高点：アンバソイラ（3018m）最低点：コーバー窪地（-116m）
行政区画	マアカル、デフブ、ガシュ・バルカ、アンセバ、セメナウィ・ケイバハリ、デブパウィ・ケイバハリの6つの地方に区分される
人口	主要言語 英語・ティグリーニャ語・アラビア語
宗教	テワフド（コプト教、エリトリア正教とも呼ばれる）とイスラム教。カトリック、プロテスタント、アンナ教等もある
農業	農業 穀物、食用油、豆類、野菜、切花、綿、コーヒー、サイザル麻、家畜、魚
工業	食品加工、飲料、革製品、衣料、繊維製品、ガラス加工、陶器
天然資源	塩、金、銀、カリウム、亜鉛、銅、鉛、鉄鉱石、御影石、大理石、石灰石

ARCHEOLOGY



古来よりエリトリアは、その地理的位置の重要性から、さまざまな文明が交差する十字路であり、それゆえに何千年にもわたって豊かな文化遺産が発展し、継承されてきました。

エリトリアに現れた最初の人類は、およそ2万年前にまで遡ると推定されていますが、紀元前8000年の人類の使った道具や、紀元前2000年の洞窟に描かれた岩絵など、各地で人類の悠久の歴史をうかがうことができる遺跡に出会うことができます。

また、紀元前9世紀から5世紀までのアドゥライト時代、1～9世紀のアクスム王国時代、8～13世紀の5つのベジャ王国時代など、さまざまな時代の考古学遺跡も、非常に多く発見され、以前は4万5千箇所あると言われていた考古学遺跡も、最近の調査では8万箇所へのぼることがわかりました。

さまざまな文明や王国が栄え、交錯してきた地、エリトリアならではの歴史を遡る考古学遺跡をめぐる旅をどうぞお楽しみください。

メテラ遺跡

アスマラから南へ136km行った Senafe の町にあります。“Senafe”というの、「サナアはどちらだ？」というアラビア語“Sanafen”からきており、昔、イエメンの貿易商人がこの地域を通るときに、この地域の山に登りこう言ったと言い習わされてきました。町の南2km のところに、部分的に発掘された古代都市メテラがあります。メテラ山山頂の鉄の十字架までは、小一時間のハイキングで行くことができます。

この都市の特徴の一つは、つい最近までは、3世紀に書かれた銘をもつ5メートルのオベリスク（石柱）でした。オベリスクの頂には、南アラビアの神のシンボルと三日月が彫られています。不幸なことに、この古代の遺跡は、エチオピア軍が故意に破壊してしまいました。石柱は今は修復され、元の位置に戻されました。現在は、発掘調査によって、いくつかの区を持つ成長する都市の全貌が明らかになりつつあります。



コハイト遺跡

都市遺跡

コハイト考古学遺跡は、アスマラから南へ120km、南部地方の海拔2600m地帯に位置しています。アディ・ケイの町から、東に15kmほどになります。

プレ・アクスム時代（紀元前500年）の都市で、1～4世紀のアクスム時代に栄えたものです。コハイトは、古代ギリシャにおいて“Koloe”と呼ばれた町のことだと考えられています。コハイトの立地は、古代紅海世界において、北方の港町アドゥリスと、南方のマタラやアクスムの間の交流の交差点という特性があり、そのため地域の最重要政治的中心地でした。

国立博物館の調査で750の遺跡が確認され、土墨や、岩絵、彫刻、円柱構造、墓所、ダム、貯水池、ネクロポリス（集団埋葬地）、時計塔、窯などが発見されました。この地域は、農業活動と同様に、宝石や象牙やお香で知られていました。コハイト遺跡は世界遺産候補の一つであり、1996年に始められたマネジメントプランは、遺跡保全のため現在も継続中です。

エジプト人の墓

コハイトの北部には、「エジプト人の墓」と呼ばれる古代の墓の遺跡があります。完全にエジプト起源のものと証明されたわけではありませんが、墓の印象からそう呼ばれています。平坦な岩山の頂上部分に、数メートル掘り下げて作られた墓で、中に入ると、花の文様が刻まれた壁や、石棺が置かれていたであろう空間を見ることができます。

コハイトの岩絵

1930年代からの調査により、エリトリアは、アフリカの角地域で最も岩絵が集中している地域だと考えられるようになりました。主なモチーフは、コブのない牛と、家畜化されたコブ牛です。家畜への描写が豊かであるのと同時に、野生動物をほとんど描いていないことから、牧畜民的な性質のものと言えます。

岩絵の研究により、完新世中期の気候変動が牧畜民のエリトリアへの移住を促したことがわかっています。この人々が、エリトリア各地に数々の岩絵を描いたのです。これらの岩絵は、階層化したヒエラルキーをもつ秩序だった社会の出現以前に描かれたと考えられ、つまり、複雑化した社会が台頭した紀元前2000年前よりも以前のことと考えられます。つまり、エリトリアの岩絵は、今から4000年以上前に描かれたものなのです。

コハイトでは、“グランドキャニオン”と呼ばれる大渓谷の近くの洞窟に、家畜などを描いた岩絵があります。崖の上から10～20分ほど下ったところにあり、観光客も訪れることが可能です。整備された道ではないので、ガイドの同行が望ましいでしょう。

シバの女王のダム

コハイトにおいて歴史的な意味で特筆すべきなのは、その規模と共に、シバの女王に関係があるとされる古代のダムがあることです。サフィラ・ダムは、長さ60m以上にわたって築かれています。建造年代は不明ですが、アクスム王国時代より以前だと考えられ、イエメンの水利システムとよく似た構造をもつことから初期のシバ王国との関係が考えられています。30年ほど前に土地の人々のために直されましたが、オリジナルの部分への脅威とはなっていません。現在も、地元の人々が水を汲みに来る姿がよくみられます。



アドゥリス遺跡

マッサワから南へ60kmの所に、地元の人々によって“Azuri”と呼ばれる古代の港町アドゥリス遺跡があります。フォロ・サブジーンの北紅海地方にあり、ズラ湾の沿岸地域、Gabaz港から3-4km内陸へ入った場所に位置しています。最寄りZula村とAfta村には、サホ民族の人々が多く住んでいます。

アドゥリスの起源はまだわかりませんが、遺跡発掘による考古学的な証拠や、ズラ湾岸の海岸平野に石器時代の遺跡が散在することから、この地域には数千年前から人が居住していたと考えられています。



※ 写真：楠哲也氏、エリトリア大使館 他

※ 現地情報の更新には努めておりますが、掲載されている情報の中には、最新ではないものが含まれる可能性があります。ご旅行の際には各自の責任で最新情報をご確認下さい。本資料掲載内容を許可無しに転載、コピー、販売等を行うことは禁じられております。本資料掲載内容を利用して発生した損害等に関して、駐日エリトリア国大使館は一切の責任を負いかねます。